<会員のひろば>

海からのメッセージ

井元健二（徳島県／牟岐東漁業協同組合組合長）

はじめに

昔の漁師の直感には、ホトホト感心をする。アワビ、天草、ヒジキ等、春の漁期が訪れる頃には一層漁師感が冴えるから不思議である。こうした漁種の取扱いは、県令による目安規制はあっても、内容については個別対応というのが一般的で、現実には依存度の高い漁種ほど漁期始めの取扱いがむつかしい。自然が相手の漁師の生活、どうしてもその日の天気次第というのが、決定条件となってしまう。今も昔も変っていません。なんでもないようで、予想困難な決定条件を、どういう方法で解決してゆくのか田舎の素晴しい光景をおみせしましょう。

漁師の直感―田舎の気象学者―

解禁日は漁師仲間にとって、一番待ちどおしい一日です。それだけに解禁日の決定権を持つ、若い世話役達の苦労は大変です。明日に備えての個人的な準備は勿論ですが、何よりも明日の天気が気にかかる。アレヤコレヤと気苦労しているのが傍目にも伝わってくるほどです。午前中の天気予報を見ては集まり、それでも心配で、午後の天気予報にも釘づけになります。結局は、これまたいつものパターンで解禁日は明日の天気次第ということで落ちつき散会、家路につくことになります。ところがこのあとの光景がいいのです。帰り道で逢うのは長老、「明日の日和はどんなんじぇ」と必ず聴いて帰りぎわの挨拶にするのです。ここは長老も心得たもので、空を見上げて即座に答え、これまた、そそくさと別れてゆきます。一夜明けての解禁日、天気はやはり長老の見たてがあたっていて、決定条件にもそれほど時間はかかりません。漁師の直感と言えばそれまでででしょうが、若い世話役達が挨拶がわりに日和を聴いているのは、案外この直感の確実性が高いことを認めているのに違いないと思うのです。解禁日の決定が心配するほどのものでないことからも想像がつくからです。私も時々、出張の機会をとらえて明日の天気を教えてもらうのですが、体験から得た田舎の気象学者は、やはりすごい、まずあたりはずれはありません。

海からの警告、「海のことは海に聴け」

ところが最近田舎の気象学者が妙に気になることを言うのです。桜の開花が遅れているとか、春さきにしては、雲の出し入れが早すぎるとか、とにかく日和が読みにくいというのです。折りしも解禁したアワビの不漁や、3月、4月の長雨は、長老のカンを鈍らす前ぶれではないだろか、いらぬ心配が先にたちます。

しかしよくよく考えてみれば、魚貝類や海草を育てるのは、人間ではないし自然環境が育てることがわかります。さらに私達漁師は海という舞台が生活の場であるにもかかわらず舞台となる海のことを全くわかっていないのが現実だと思うのです。こんな私共が陸の舞台で悲しんだり、怒ったりしている、こんなことで漁師の資格があるのだろうか、考え込んでしまいます。「人間側の都合ばかりを通すやり方は、これからは許さないよ」と自然環境は警告しているようにも思えるのです。「弱音を吐くな、海のことは海に聴け、それがお前の仕事だ」と長老のカミナリが頭の上に落ちそうな今日の天気、漁師の直感は先々まで見通しているかのようでもある。